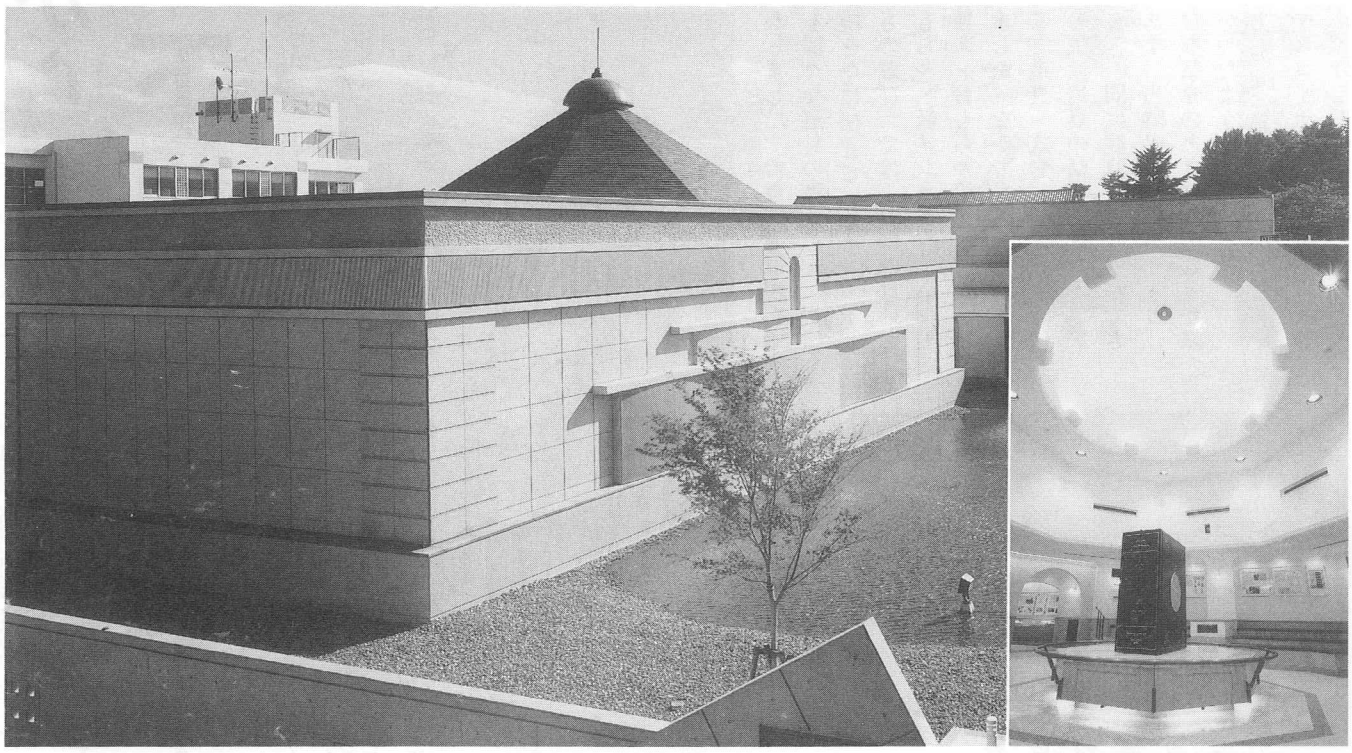
1996.1.1 第1号

吉野作造記念館ニュース

〈編集・発行〉 吉野作造記念館（古川市福沼一丁目2番3号 TEL 23-7100）



開館一周年を迎えて

古川市長 中川俊一

市民の皆様には、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本年は、吉野博士が民本主義を唱えてから80年――。

私共は、市民の誇りである吉野博士についての理解を深めるとともに、その時代、時代に問われているデモクラシーについて学び、博士の精神を後世へと発展・継承させることは、今日の私共の責務と思います。

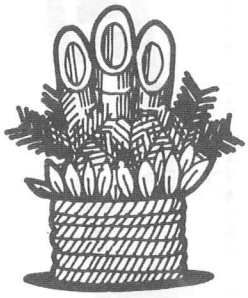
さて、市民待望の吉野博士の記念館開館式は、昨年1月29日（博士誕生日）に博士長男の俊造氏、博士の孫弟子である三谷東京大学法学部長、中央公論社会長ご夫妻をはじめ関係者多数にご臨席賜り開催し、以来お陰様をもちまして、1年が経過いたしたところであります。

館の運営にあたりましては、「デモクラシー」をコンセプトに、まちづくりのシンボル施設とし、また、市民のための学習の場として、広く来館を戴いているところであり、昨年の7月には、1万人目の入館者を迎えたところであります。

館のメインの常設展示室には、博士の著書、書簡、自筆原稿をコーナーに分けて展示いたしておりますとともに、博士の生涯を映像により紹介しておりますので、博士の啓蒙思想家としての多面的な功績、人間性を身近かに感じて戴けるものと存じます。

また、只今は、台東区との姉妹都市交流の一環として「江戸から東京へ　下町のくらし」と題した企画展を今月末まで開催いたしておりますので、ご来館をお待ち申し上げるものであります。

本年におきましても、市民皆様から親しまれる記念館を目指し、企画展の開催、講演会の開催、子供向けの企画等ソフト事業の展開に取り組む所存でございますので、ご支援とご協力をお願い申し上げましてご挨拶といたします。



企画展

江戸から東京へ ―下町のくらし―

1月28日まで

記念館では現在、ササニシキ資料館と共催した初めての企画「江戸から東京へ」を開催しています。これは古川市と台東区とが姉妹都市提携していることから、台東区立下町風俗資料館のご協力をいただいて実現したものです。是非両館ともご覧ください。

さて、当館では「下町のくらし」と題して、江戸時代からつづく庶民の長屋での暮らしぶりを紹介しています。

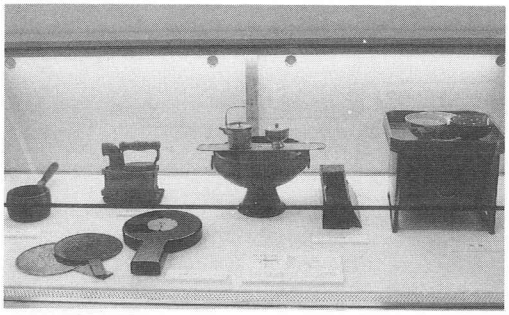
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「長屋でのくらし」「職人の仕事」「子どもの遊び」の三つのコーナーにわけています。「長屋のくらし」では、「遠い親戚より近くの他人」という言葉通りの共同体としての生活を、御歯黒の道具、箱膳などで表しています。「猫炬燵」は古川でも少し前まで使っていました。

「職人の仕事」では、左官道具や大工道具などで、長屋を建築する大工仕事を中心に紹介しています。また、足袋が出来上がるまでの過程を道具や型で表わしました。台東区では現在でも様々な道具の職人さんが、伝統を今に伝えています。「子どもの遊び」では、なつかしいおもちゃ・紙メンコ・ベーゴマ・独楽・おもちゃ絵などを展示しました。なかでも圧巻は、ままごと道具一式で、明治大正時代の生活用具の精巧なミニチュアを、一同に観覧することができます。当時は遊ぶというより、ひな祭りのときに飾ることが多かったようです。

また、今回は昔の遊びを体験するコーナーを特別に設けました。けん玉や双六など、昔なつかしい遊びに一時を過ごしてみてはいかがでしょうか。

現在開催中の企画展「下町のくらし」


お歯黒の道具

区名の由来

区の名称は、ダイと濁らずに「タイトウ」である。「台」は上野の高台を、「東」は上野の東に位置する浅草を表わしている。このように区の姿を象徴すると共に、「台」は台覧・台臨という言葉があり、めでたさや気品の高い文字。「東」は日出ずる所であり、若さを感じさせる。これらの字義・解釈にもとづき「若さ」といったことを「台東」の名は象徴している。

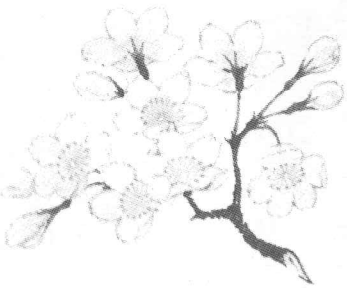
（特別区制施行・昭和22年3月）

区章の由来

「台」と「東」を重ね合せて図案化したもの。中央の白色は「台」、まわりの赤色は「東」を表わしている。白色の区別は、使用の場所によって自由に変えることができる。

（昭和26年4月18日制定）

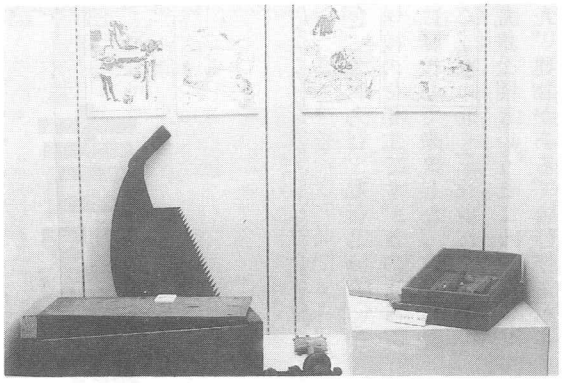
●人　口　155、804人
●世帯数　71、461戸
●面　積　10・08㎢
（平成7年4月1日現在）
●区　木　さくら
（バラ科　落葉高木）



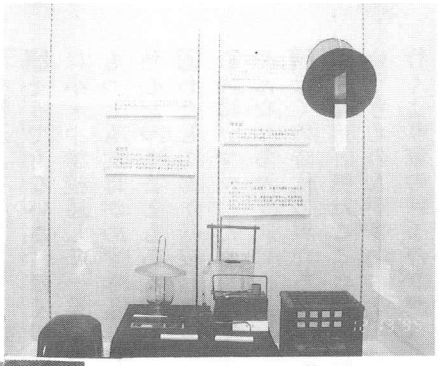
下町風俗資料館って？

上野駅から歩いて5分、不忍池のほとりに立つ台東区立下町風俗資料館。1980（昭和55）年に開館し、関東大震災前の江戸情緒を残した長屋や商家、路地の様子をそのまま再現しているところが大きな特徴です。展示品は、ほとんどが40～50年前まで家にあったというなつかしいものばかり。東京の下町というだけでなく、ひと昔前には日本のどこにでも見られた光景が、そこにはあります。

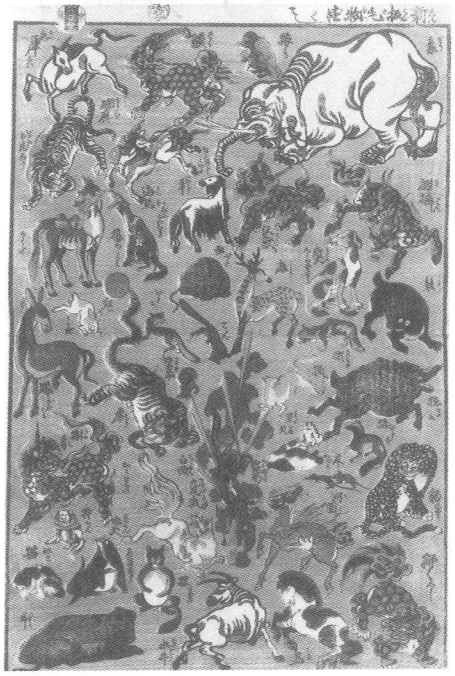
今回の企画展では、ササニシキ資料館、吉野作造記念館の両館で200点あまりの資料をお借りしました。



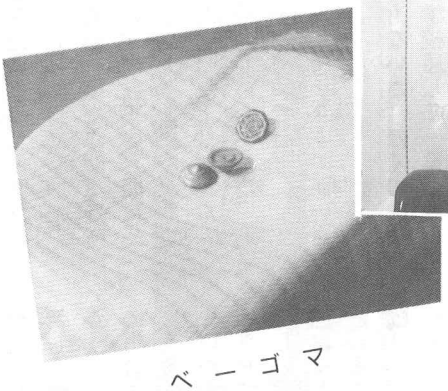
大工道具・左官道具など



昔のあかりの道具

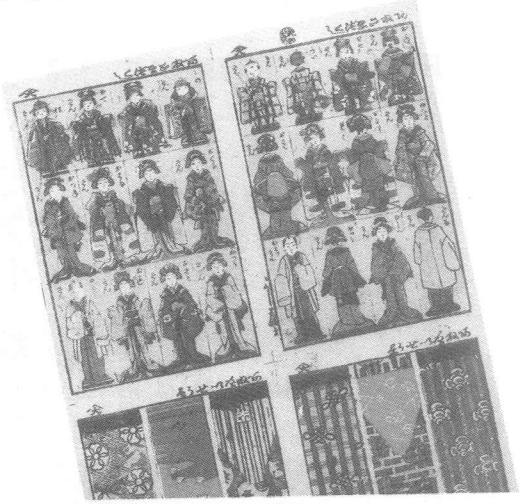


おもちゃ絵



ベーゴマ

メンコ



おもちゃ絵

―むかしのあそび―

馬とび

二組に分かれ、じゃんけんで負けた組が先に馬をつくり、勝った組がその上にとび乗る。全員乗ったところで先頭どうしが馬きめのじゃんけんをし、負けると馬になる。馬は乗り手を振り落そうとし、乗る方は、わざとドシンと乗って馬をつぶそうとする。落ちると馬が交替、つぶれるとまたやりなおし。全員が乗ったところで10かぞえ、双方とももちこたえたら馬をかわるというやり方もある。

押しくらまんじゅう

背中を向けあい、腕を組み、「押しくらまんじゅう押されて泣くな、あんまり押すとアンコが出るぞ」と大声で歌いながら押しあう。手を放して出たものが失格。寒い日にすると体が温たまっていい。

大正時代の交換札

吉野作造ってどんな人？

Q こんにちは。私はじゅん。中学校の2年生です。きのう古川に転校して来ました。夕方ちかく、家の近くを散歩していたら、荒雄公園というところに来ました。建物がある。吉野作造記念館だって。入り口はどこかな？あっ、ここね。100円だって。ちょっとはいってみよう。映画をやってるんだ。みてみよう。

（ビデオの上映がはじまる。吉野作造の小学校時代のシーン…いつの間にか眠くなる。するととなりに座っている人がしゃべりかける）

A ああ、なつかすいなあ。ここでよくあそんだなあ。いちょうの木はいまもあっかなあ。ところで、きみは古川のひと？

Q なに、この人？わたしはここに越して来たばかりよ。でも、ビデオの写真によく似ているひとね。

A そうか。ついなつかしくてね。古川は、街道沿いの宿場町として昔から栄えていた。そして、肥沃な土地と水を利用して米作りがおこなわれてきたんだ。

Q ふうん。あなたはどうしてそんな着物をきているの？

A 昔はみんなこんな格好さ。学校もいまみたいにカリキュラムでがんじがらめではなかった。小学校の初めの頃なんか、近所のおじさんが、仕事の合間にやってきて字の書き方なんかを教えてくれたものだよ。ちゃんとした先生なんかいないんだ。席もお姉ちゃんの隣でね。

Q そんなんじゃテストで悪い点になるわよ。

A そうでもないさ。ぼくの成績は小・中学校通して一番だった。もっとも父母がめずらしく教育熱心だったこともあるけど。

Q わたしなんか転校したばかりなのに、ママったらすぐ塾探し。やんなっちゃうわ。

A ぼくの時代の親たちは、学校に行くほど無駄なことはないという考えの人が多かった。学校行くより家の仕事の方が大事だ、ってね。でも僕の父はちょっとちがっていた。うちの家業は綿屋だったんだけど、父は政治に興味があってね、よく家を留守にしてあっちこっち飛び回っていたものだ。新聞の取り次ぎもやってたから、もともと政治や新しい情報に興味があったんだろう。それでぼくにはよく学校の復習をさせた。綿屋を継ぐのは一番上のしめ姉さんに決まっていたもんだから、ぼくには勉強させて医者にさせようとしたらしい。

Q お父さんのいうことに反発を感じることはなかったの？

A うん。当時新聞なんてとてもめずらしかったから、早く読んでみたくてね。それに父だけじゃなく、小学校の先生で雑誌好きの青年がいてね、その先生のうちに毎日のように遊びにいって本をみせてもらっていた。活字にすごく興味があったんだね。

Q ふうん。活字なんて本屋に行けばいいんじゃない。

A そのころは本屋はまだ商売にならなかった。ぼくにとっては本を読むことが唯一の楽しみだった。

Q それで近所の人から何ていわれてたの？

A 近所の親たちは「吉野屋の作さんのように」を口癖にして子供を教育していた。中学校に入ると決まったときは、古川では初めての事件だって大騒ぎされた。みんなで旗を振って、仙台に出る僕と父を見送ってくれた。

Q 中学にはいるくらいで？

A 当時中学校は県内にひとつしかなかったし、試験に合格しないと入れないんだ。それに仙台は今とくらべると途方もなく遠かった。小牛田までは歩くしかなかった。そこから開通したばかりの汽車で仙台までいった。汽車のなかでは景色もみずに眠りこけてしまって、こんな風で大丈夫かと父が心配したそうだよ。中学にはいると仙台に下宿することになった。当時の学制では小学校は8年だったから14歳のときだ。

Q それじゃあ、わたしと同じ年ね。それで下宿なんて、さびしくない？

A うん。そりゃあ寂しかった。だから仲間をつくって同人誌をはじめたり、友人をつくった。でも大好きだったしめ姉さんが病気で急死してしまったときなんて、つらくてね。月をみると、姉さんのことが思い出されて、そんなときはとても寂しかったな。でもこのことを作文に書いて、中3の時「学生筆戦場」に応募したら一等賞をもらった。

Q 作文が得意だったのね。この中学校、今でもあるの？

A いや、いまは仙台第一高等学校といっている。僕の時代の校長先生は大槻文彦（おおつきふみひこ）といって、国語学者の

高校生のころの吉野作造（右側）

大家だった。戦前の辞書でベストセラーだった「言海」をたった一人でつくりあげた、すごい人だ。おじいさんは大槻玄沢（げんたく）といって江戸時代の有名な蘭学者で、代々学者の家系だ。大槻先生は、倫理の授業を受け持っていて、教科書のままでない実践的な道徳を教えてくれた。年に2回は全校遠足というのがあって、先生と歩いたこともあった。卒業してからはぼくたちが中心になって、東京で年1回は先生を囲む会を開催して楽しく過ごしたものだよ。

Q 休みの時は何していたの？

A 仲間で秋田に徒歩旅行に出掛けたことがある。古川を起点にして、盛岡→黒沢尻→横手→秋田→山形→蔵王→仙台と戻って来た。その間14日間、野宿をしたり、おもしろい旅だった。体力もついたし。あとは、仲間内で同人誌を編集して、お互いに批評しあったりした。ぼくは昔から、人前ではおとなしく温厚だったんだけど文章では随分きついことを書いて、仲間から反感を買ったこともあった。この時、ぼくをかばってくれた気仙沼の小山東助君とは生涯の大親友になった。ん、おっと時間だ。もういかなくちゃ。

Q あら、閉館時間だわ。また来たらお話ししてくれる？

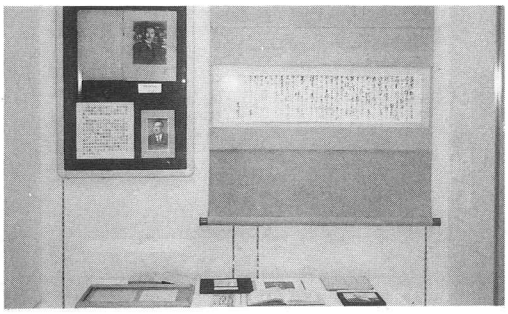
A もちろん。じゃ、また。

平成7年 記念館の一年

1月29日
開館記念式典
記念特別講演
「吉野作造と現代」
（東京大学法学部長
三谷太一郎氏）

～3月30日
特別展
「吉野作造をめぐる人々」

3月31日
作造忌講演会
「吉野作造と東アジア」
（京都大学名誉教授
松尾尊兊氏）


特別展「吉野作造をめぐる人々」

三谷太一郎氏講演

5月3日～6月30日
企画展
「赤い鉄道馬車」
―ふるかわの明治大正―

7月25日　開館以来1万人突破

8月1日～9月30日
企画展
「明治のなかのヨーロッパ」

8月10日～9月15日
ミニ企画展「私の戦後50年史」

9月20日～24日
NHK仙台共催企画
「赤い鉄道馬車」
―ふるかわの明治大正―

11月1日～12月26日
企画展「異郷浪漫の風景」

11月23日
講演「ブゼル先生伝著者
栗原基のこと」
（元東北学院大学講師
藤一也氏）

12月8日～1月28日
企画展
「江戸から東京へ」
―下町のくらし―
（古川市台東区姉妹都市交流企画）

松尾尊兊氏講演

「明治のなかのヨーロッパ」展

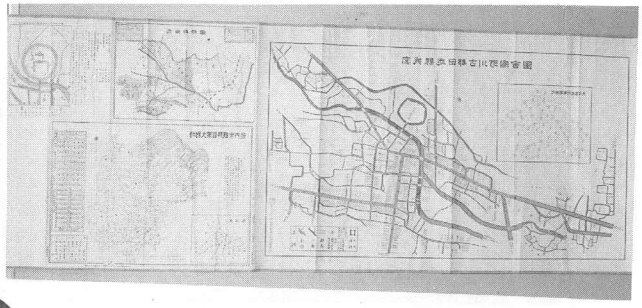
新資料紹介

この一年、記念館に寄贈された資料を紹介します。

① 古川町宿舎図

谷地森隆氏寄贈（市内西館在住）

明治34年10月に行われた東北特別大演習の際、兵隊が泊まる民家の部屋割りや拝観案内のために志田郡古川町役場が作成したもの。谷地森隆氏の祖父谷地森隆徳氏が書記として役場に勤めており、演習受け入れの会計係として宿割りや地図の作成にかかわった。当時の古川の様子を知る貴重な資料。



古川町宿舎図

② 吉野年蔵町長の時の辞令

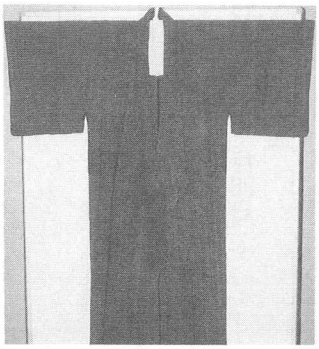
吉野作造の父年蔵が町長の時（明治32～34年）の辞令は、谷地森隆徳氏が書記として役場に勤めていた時のもの。吉野年蔵が町長であったことをしめす一次史料である。

たまの夫人の着物

千田きみよ氏寄贈（若柳町在住）

吉野作造夫人のたまのが着用していた着物。

たまの夫人の世話をしていた、吉野の姪の故「みよし」さん（若柳町で幼稚園経営）より、千田さんが貰い受けたもの。



たまの夫人の着物

どびんと茶碗 浴衣生地

吉野俊造（作造長男）氏寄贈（調布市在住）

吉野作造が歌舞伎俳優市川猿之助（初代）からもらったとされるもので、屋号の沢瀉屋（おもだかや）の紋が入っている。次回企画展で展示する予定。

吉野作造名刺

八木福次郎氏寄贈

吉野作造の名刺。だれに宛てたかは不明ながら、裏に走り書きで「当方の都合尤もよろしく候間早速御出で被下度明日は是非御一泊の上明後日御出発の程奉願候。今夜御出で被下候事と信じ直ちに帰宅偏に奉願上候」とある。

東京神田神保町の八木書店店主より寄贈された。柴田宵曲（しょうきょく）氏が買った古本のなかから出て来たもののようである。

吉野作造からの牧野輝智あて葉書

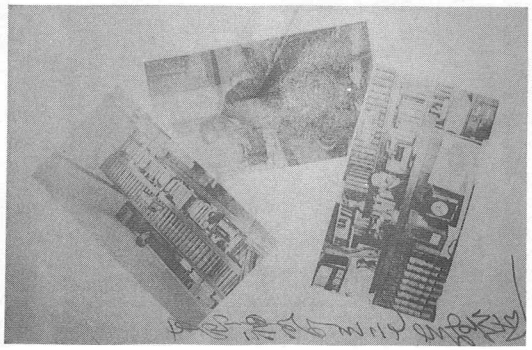
牧野東彦氏寄贈

大正13年7月15日。

「本をわざわざ御送り下さいましてありがとう存じます。私の尤も不得手な方面であるに依り頂戴したのを機会に一つ勉強してみる積りです。」

牧野輝智は明治12年熊本生まれ。東京専門学校（現早稲田大学）を卒業し、熊本市立商業学校、佐賀中学校を経て、明治38年古川中学校教諭となった。明治44年には東京朝日新聞社に入社、大正12年10月には編集局の中枢となった。主に経済関係の記事を担当し、吉野が朝日新聞に入社後交流関係をもった。

牧野が送った本は「通俗財話」といい、吉野にとって経済は「尤も不得手な方面」であったようだ。



牧野輝智あてのハガキ（裏）

明治文化全集 書目解題

安岡昭男氏寄贈

当館では「明治のなかのヨーロッパ」と題して、吉野作造と明治文化研究会について企画展を開催しました。その際、法政大学教授安岡昭男氏より、当館で所蔵していなかった「明治文化全集書目解題」を寄贈して頂きました。これは、「明治文化全集」の刊行に先立ち、パンフレットとして印刷発行されたもので、明記してはいないが吉野が大半の文章を書いたといわれている貴重な史料である。

人間・吉野作造を語る

吉野記念会例会記録より抜粋。1950（昭和25）年11月27日（第1回）

吉野記念会は、吉野の教え子だった石川清、河村又介を中心に、吉野作造の人間性を中心に、それぞれの思い出を語り、記録しておこうというもので、記録では第15回（'62年3月）まで例会を開いた。ここでは、吉野作造に対する回想部分を抜粋して掲載する。

N　私は、吉野先生からは、学問のことよりも人として非常に教えられた。まず、第一に私が読売新聞社を馘になったとき、吉野先生の紹介で大正8年ある新聞社に入れて貰ったがすぐやめてしまった。それは、最初論説課長にしてくれるという話だったのに、課長にしてくれなかったからである。ところで、吉野先生は当時大阪毎日の顧問であったが、東京毎日が吉野先生に歩の悪いことを書いたとかで吉野先生は御機嫌斜めであった。その時私はつくづく考えたが、朝日・毎日は東洋一の新聞だなどと言いながら、吉野先生には遠慮しなければならぬ。吉野先生個人の力は実に大したものであると。

そこで私は、斜めになった先生の御機嫌を直して貰おうと思って先生に手紙を出した。すると先生は「毎日と私との間は公的なものである。情けにおいては、君の成功を祈る。」と御返事下さった。先生は、こうした点、公私の別は実に明確であった。

それから、私が朝日新聞にいたときのこと。私は、このとき3年間朝日に勤めていたのだがこれは私の生涯で最も長い勤務期間である。ところが、実は、後できくと、その3年の間に、私は8回もくびになりそうになったのだが、そのたびごとに、吉野先生が「あれは物になるから。」と言っては、私の首をつないでいて下さったものなのでした。吉野先生は、このような方でありましたから、当時の暴れん坊連中も、吉野先生には参っていました。

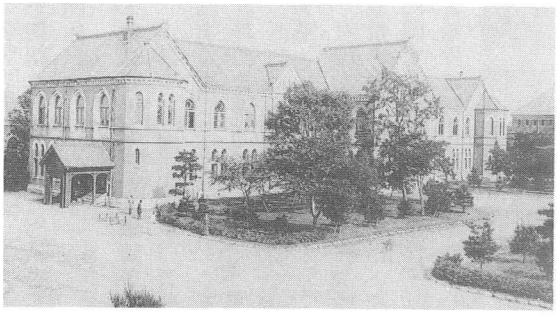
吉野先生には、そうした暴れん坊をして恩義を感ぜしめるような温かいものがありました。このような先生は一寸少ないのではないでしょうか。と同時に、先生は非常に責任を重んずる方で、「日本人は実に簡単に人を紹介するが、紹介は責任をもたねばならないから、わたしはむやみと紹介をしない。そして紹介をする以上は責任をもつ。」とよく言われていた。日本の政治家は実に簡単に人を紹介するが、わたしは吉野先生の紹介論に倣っている。

吉野先生と小野塚先生とを比べると対照的なところがあって面白い。例えば、小野塚先生の机のうえはいつもきちんとしているのに、吉野先生のそれは混然雑然としている。

また、「勉強するにはどうしたらよいか。」との質問に対して小野塚先生の答えは、「オーソリタティブな本を読め。」というのであったのに対して、吉野先生の答えは、「問題をつかまえろ。色んなインデックスから探り出せ。」というのであった。しかし、とにかく、このお2人からは大変よい影響を受けた。

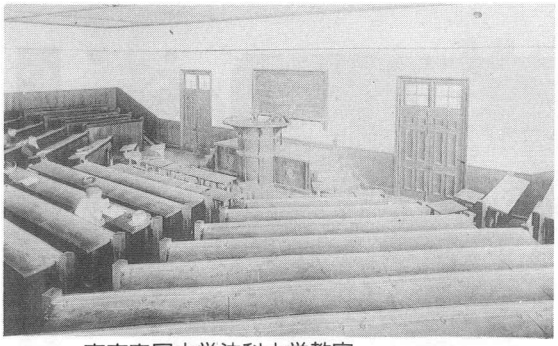
吉野先生は人間的に懐しい、深い感銘を受けた偉い人であった。黎明会などでの講演で福田徳三先生の声は会場の3分の1位までにしか聞こえなかったが、吉野先生の声は、余り大きくはなかったけれど、澄んだ声であって7・8分位までは聞こえたものでした。

大変断片的に申し上げましたけれども、これで終わります。



東京帝国大学法科大学（吉野作造入学当時）

O　吉野先生のことは、相当遠くから尊敬し申し上げていた。私は明治45年、はじめて吉野先生とお会いしたのだが、それは統計茶話会の席上で、先生は袁世凱の家庭教師をして居られたときの話をされたが、「その間、学問をしないで損をした。袁世凱の家庭は余り立派でなかった。支那の家庭はいろいろ面倒で面白かったと同時に驚いた。」などという開けっぱなしなお話しをなさるのに驚いた。大正5年、吉野先生の民本主義が中央公論に出た。これは当時のインテリ



東京帝国大学法科大学教室
（吉野作造もこの教室で講義を聴いた）

を驚胆させた。そして、美濃部、上杉の憲法論争が如何なる政治的意味を持っていたかということを、本当に日本人に知らせたのは吉野先生である。

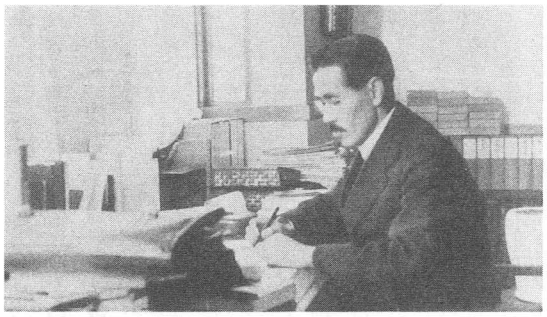
それから私は、アメリカへ行ってデモクラシィを自分の眼で観、帰朝すると森戸事件だ。黎明会の大立者吉野先生が特別弁護人として法廷に出、森戸君を弁護した。当時は日本の思想運動のクライマックスであった。そして反動の始まりのときでもあった。吉野先生は非常によい弁論をされた。また、当時吉野先生は中央公論の毎月筆者として、日本を本当の意味でリードしていられたが、問題の把握が正確で速く、しかも、論断が適確であった。その頃は、福田、河上、吉野、それに長谷川如是閑の時代と言われていた。大正9年頃のことである。しかも、時代の問題を適確に指示論断する点においては、吉野先生に優るものはなかった。吉野先生の、学問と実際とに対するセンスは正に天才的であった。私の友人である舞出長五郎や矢内原忠雄が何故に学者になったかというと、吉野先生がはじめて外国から帰られてドイツ社会民主主義の論議をなされたのを、両君が聴いて非常に面白く思い、何とかしてこのようになりたいと思ったからだという。こうして、吉野先生は、学問的な良い意味でのジャーナリズムのセンスが強かった。晩年の吉野先生にはもう少し近づいて公私とともにお世話になった。とにかく、先生は人から何をきかれても直ぐ答えた。どんな人物についても、あれは何点と直ぐ答えてくれた。こういう人は一寸ない。

家族集合写真（右2人目が吉野作造）

H　私は吉野先生の門下の一人です。先生からはいろいろ教えて戴いた訳ですが、殊に生涯の指針として戴いたのは、民本主義と国際主義です。

私は、先生が、中央公論に「朝鮮の統治を論じて民主主義の本質に及ぶ。」という論文を書かれたのに感激して、朝鮮で働こうと決心した。ところが、朝鮮へは行かず、大正8年国際連盟事務局に入り、30何年外国生活をした。つまり、この間は国際主義をとったことになる。

ところが、終戦後、昭和22年欧州にいた者が一ケ所に集められ4千トンの船で送還されることになった。そしてマニラで日本船に乗り換えた。そのとき、船長の曰く、「今の若い者は民主主義が分からなくて困るから若い船員に対して誰か話をしてくれぬか。」と。そして私にそれをやれ、という。人もあろうに私にやれというのは、それでも吉野先生の匂いが私のどこかについていたのかも知れないなどと考えた。とにかく、2時間程度の間、民主主義は日本においても決して新しいものではなく、既に吉野先生の書かれた民本主義があるのだから、詳しくはそれを読んでくれ、などと話をしたこともあります。ところが日本へ来てみると、吉野先生の本は焼けていることに気がついた。そこで、若い人に吉野先生のお考えを分かり易く話ししてくれるような方法をとって貰いたいと思います。


大正10年頃の吉野作造

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※吉野記念会第1回のメンバー

石川清（日本海底電線社長）、河村又介（最高裁判事）、新居格（杉並区長）、大内兵衛（法政大学総長）、星島二郎（衆議院議長）など、主に東京帝国大学で吉野に影響を受けた人々が集まった。

※黎明会

1918（大正7）年12月、吉野作造や福田徳三など、学者たちが専門領域を越え、民本主義を街頭に主張するため結成した団体。

※美濃部・上杉の憲法論争

1912（大正元）年、天皇に関する憲法の解釈をめぐって行なわれた論争。

※森戸事件

1920（大正9）年、東大助教授の森戸辰男のクロポトキンに関する研究の筆禍事件。学界、言論界に対する弾圧事件として反響を呼んだ。

記念館頒布品の紹介

●「古川餘影」復刻本　1、200円

●記念テレホンカード　800円

●記念色紙　300円

●吉野作造の紹介冊子　400円

編集後記

吉野作造記念館ニュース創刊号をお届けします。開館して1周年を迎えました。

運営はまだ始まったばかりです。市民の皆さんのご助言やアイディアをお寄せ下さい。

市民皆様のなかに長く生き続ける記念館をめざしていきたいと存じますので、どうぞご支援をお願いいたします。